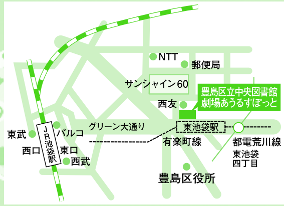
豊島区立中央図書館報

図書館通信

第51号
季刊（冬）
2019

発　行●豊島区立中央図書館
東京都豊島区東池袋四－五－二
ライズアリーナビル四階・五階　〒一七〇－八四四二
電　話●〇三－三九八三－七八六一
FAX●〇三－三九八三－九九〇四
ホームページ●http://www.library.toshima.tokyo.jp/
発行日●平成31年1月



トピックス

●巻頭言　川村学園女子大学 学長　熊谷 園子・・・・・1ページ
●こらこらコラム　ほぼ日の学校長／編集者　河野 通和・・・・・1ページ
●図書館と私　大正大学文学部教授　大場 朗・・・・・2ページ
●生涯の一冊　株式会社ユニバーサルスタイル 代表取締役　初瀬 勇輔・・・・・2ページ
●この本カフェ・・・・・2ページ
●豊島区とマンガ　としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会　小出 幹雄・・・・・3ページ
●読んで観る！映像・舞台原作の世界　立教大学兼任講師　後藤 隆基・・・・・3ページ
●図書館イベント情報・図書館カレンダー・・・・・4ページ

川村学園女子大学　学長
熊谷　園子（くまがい　そのこ）

「知」は先人のコピーから

　年は取りたくないものである。というのは、巻頭言を頼まれてから本について考えてみたが、最近はテレビばかり観ている自分に気が付いてしまったからだ。元は活字好きで文庫本程度のボリュームなら全6巻本を二日半ぐらいで読んだ記憶がある。眠るのも嫌って。
　その6巻本とはフラウィウス・ヨゼフスの『ユダヤ古代誌』であったと思うが、それが人と本と社会の繋がりについてちょっとした示唆を私に与えたように思う。ネットの時代が到来して、炎上とか著作権とか随分きちきちとしてきた感のある昨今、「ボーっと生きている」世代（私）に対して、うっかりしていると損害賠償の案件になるよと教えられる機会がしばしばある。その語調は真剣で正しいが、たいてい威圧的なのが特徴である。
　コピペでレポート！、そんなものはもちろん許されない。ただコピーというと、この『ユダヤ古代誌』も今日まで伝えられてきたのは、その昔、修道僧たちが膨大な時間をかけて原本を羊皮紙に書き写してくれたからだ。これは旧約時代から紀元後60年代ユダヤ戦争前夜までのユダヤの歴史だから終盤はキリストが活動した時期を含んでいる。僧たちはキリストの足跡を見つけようとそれこそ寝る暇も惜しんで作業に勤しんだに違いない。ところがどこまで書き写してもイエスの記述がない。洗者ヨハネがあってイエスがない！悔しくて悲しくてたまらなくなった僧は、思い余ってイエスのことを書き加えてしまったらしい。
　私たちは過去から大いなる「知の移転」を受けて、今日の文明社会を築いてきた。そこには血の通った生きた人間の様々な想いや意図も織りこまれている。その恩恵にこそある我々現代人が、まるですべての勝者のように威圧的に正義を振りかざすのはちょっと違和感を覚えるのだ。寛容さも同時に受け継いで行くにはやはり多様な「知」の探索・図書館が最も有用な場として私たちに常に開かれていることはとても大切なことだと思う。

東京豊島区目白の生まれ。
青山学院大学大学院文学研究科修了（文学修士）。
1988年4月　川村学園女子大学文学部講師。
1994年4月～1995年3月Oxford University College にて客員研究員。
2000年4月より図書館長・文学部長等を歴任して2014年4月より学長。

新航路【48】健康寿命と読書の意外な関係

新年　あけましておめでとうございます
　昨年10月にNHKで放送された番組「AIに聞いてみた どうすんのよ!? ニッポン 第3回 健康寿命」で、日本全国の65歳以上、のべ41万人の生活習慣や行動に関するアンケートをNHK独自に開発した人工知能が分析した結果、「健康寿命（日常生活に制限がなく、健康で自立して生きられること）」と最も多くつながっていたのが、「本や雑誌を読む」ことでした。山梨県は運動やスポーツの実施率では全国最下位なのに、男女とも健康長寿。人口に対する図書館の数が全国1位が影響しているのではないかと。また、海外ではすでに「本を読むことが長寿につながっていた」という研究結果も出されているようです。
　番組の中で千葉大学の近藤克則教授が、「“心が動くと体が動く”という言葉があるが、何かやってみたいことを見つけると、旅行に行こうとか、行動を起こそうとなる。読書は心を動かし、行動を起こすきっかけを与えてくれるのでは」とコメントされていました。※
　2019年、豊島区は東アジア文化都市の日本の代表として、中国西安市、韓国仁川広域市と国境を越えて文化による国際交流を行います。図書館としても様々な企画や事業を計画しています。第一弾として、「日本の伝統芸能」を中央図書館5階で1月24日まで展示しています。
　今年も「国際アート・カルチャー都市」豊島区にふさわしい図書館として、また、健康長寿に貢献すべく、更なる飛躍を目指しますのでどうぞご期待ください。

※https://www.nhk.or.jp/special/plus/articles/20181029/index.html

こらこらコラム　第7回　「そこへ行きたい」理由

ほぼ日の学校長／編集者　河野　通和

　昨年より11月1日が「本の日」になりました。「11月1日は本屋へ行こう！」と呼びかけるキャンペーンも展開されました。読書週間（10月27日～11月9日）と連動させて10月1日から11月30日まで行われたようですが、残念ながら私の目には留まりませんでした。この間、何軒かの本屋さんに立ち寄っていたはずなのですが……。
　11月1日はすでに、2012年9月、国の制定する記念日として「古典の日」になっています。『源氏物語』の存在が初めて具体的に書き留められた『紫式部日記』1008年11月1日の記述にちなみ、『源氏物語』1000年紀を機に法制化が実現しました。「本の日」と親和性も高いのですが、いまのところ連動している気配はないようです。
　「本の日」を提唱したのは地方有力書店の団体「書店新風会」で、京都を中心に大垣書店を営む同会会長の大垣守弘さんがイニシアティブを取りました。11月1日に決めた理由を同氏は「考える力や創造・想像する力は1冊の本から生まれるので『1』にこだわった。また、11・1は本棚に差した本をイメージさせるから」と語っています。
　ヒントになったのは12月1日を「映画の日」とし、毎月1日を割引サービスの日にするなど、来館者の低落傾向に歯止めをかけた映画業界の事例だとか。ただし、値引き販売に走るのではなく、来店促進への知恵を業界全体で絞り、書店は各店舗に見合ったイベント、企画を実施し、ともかくアクションを起こそうというのが初年度の狙いだったようです。
　私の視界に入らなかったように、浸透するまでには時間がかかるでしょう。人がわざわざ足を運びたくなる（そこへ行けば楽しいことが待っている！）と感じるような「場」作りには、周到さと粘り強さが必要です。書店自体に本を扱うことの楽しさ、喜びが溢れていなければ、人の心はなかなか動きません。近くの図書館との連携も今後のチャレンジになるでしょう。

生涯の一冊（50）

オリンピアン・パラリンピアン編

■ビルマ・アヘン王国潜入記
高野秀行／著
草思社　1998年

㈱ユニバーサルスタイル 代表取締役
初瀬 勇輔（はつせ ゆうすけ）

中央大学法学部卒業。大学在学中、緑内障により中心視野を失い視覚障害となる。その後、視覚障害者柔道と出会い、障害を克服。北京パラリンピック出場を果たす。現在、㈱ユニバーサルスタイルの代表を努めながらパラスポーツの普及活動も精力的に行う。

冒険に出たくなる一冊

私は小さいころから本が好きでした。本と名前が付けばどんなものも開いて読む本の虫だったようです。大人になってからもその習慣は変わらず、視覚障害となり文字を読むことができなくなった今でも音声図書という形式で年間200冊前後の読書を楽しんでいます。意外かもしれませんが私のような視覚障害者はかなりの数いて、年間500冊以上読む強者も存在します。そんな私にとって今回のテーマの「生涯の一冊」というのはなかなかに難しいお題です。しかも普段からジャンルのえり好みもなく、実用書からビジネス書、古典から現代の小説、新書に自己啓発本まで興味があれば手を出してしまう雑食の本好きです。目が悪くなる前は古書店のおやじにも憧れたこともありました。しかしこのお題のおかげで本当に自分が胸を躍らせわくわくしながら読んできたジャンルを知ることができました。どうやら冒険、探検、潜入、旅、食、ハプニング、生還、調査、体当たりというキーワードが私の大好物らしいです。ガリバーやロビンソンクルーソー、15少年漂流記、人跡未踏の地への冒険や探検もの、旅行記などを好んで読んでいることに気づきます。危険をかえりみず自分の信じることに挑戦する作品や小説、私が持ちたいと思っている探究心や成長意欲というものに共感しているのかもしれません。パラリンピックだけでなく、障害当事者として社会にスポーツやビジネスでチャレンジしている自分をそうやって奮い立たせているのかもしれません。

エンターテイメントなノンフィクションのジャンルからの生涯の一冊としたいのは高野秀行さんの「ビルマ・アヘン王国潜入記」です。「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それをおもしろおかしく書く」をモットーとされているだけあってどの著書も面白くて仕方ないですが、こちらの本は特にずばぬけてハチャメチャです。アヘンの一大産地へ潜入し、アヘンを育て、収穫し、ヘロイン中毒になってしまいます。アヘンを善悪の彼岸において一人の村人として混ざって体験していること、それらを魅力的な文章にしてしまう観察力、筆力にやられてしまいました。人生って何でもできる、チャレンジってできると思わせてくれます。現代に生きる作家に大好きな人がいると続々と新作が出るのでそれも楽しみのひとつです。素敵な作家に出会うためにこれからも読書の旅を続けて行きたいと思います。

図書館と私 37

大正大学文学部教授
大場　朗

【プロフィール】
博士（文学）。専門は『源氏物語』、西行和歌、『宝物集』と仏教思想の関係。著書に『宝物集の研究』（おうふう）ほか。（現在、中央図書館の古典文学講座「源氏物語と仏教」の講師）

図書館と「胎内めぐり」

学生時代のある夏の日の体験である。四十年以上も昔で、当時、学生の下宿には冷房などはほとんどなかった。私は猛暑の中、読書の継続に限界を感じ、四畳半の部屋を出た。足は、自然と大学の図書館に向いていた。修士論文用の参考図書を見る必要もあったが、涼を求める方が大きかった。吹き出る汗を拭きながら、吸い込まれるように図書館に入り、冷房を全身で受け止めた。汗が引くのを機に、専門書が並ぶ書架に移動した。

この日は、暑さの限界もあったが、ここ数週間思うような研究書や史料に恵まれず、読めば読むほど出口が見えなくなり能力の限界にも直面していた。悶々としながら、絶望的な思いであてもなく書架を巡り歩いていた。背表紙の書名にうつろな目を向けるだけで、手にすることもできない状況であった。整然と並んだ著名な研究者の名前とタイトル。どの本も分厚く、威圧感があった。その時、ふと著作の背後にある執筆者の精神の営為に思いが及んだのである。何十年という期間、孤独の中で、壮絶な精神の格闘を経て、この書架に並んでいるのではないか。しかも何も言わず物静かに。先程まで煩悶していた私の思いは「書架の精神たち」から無言の激励を受け、少しずつ癒やされるのであった。私は嬉しくなって図書館を出た。見上げると入道雲があり、相変わらず猛暑であったが、何かが変わったような気がした。

私はこの奇妙な体験を図書館の「胎内めぐり」と称して、時々思い起こしている。「胎内めぐり」とは、有名寺院の本尊の下（地下）に付設された狭くて暗い通路を巡って出口に至る行為で、過去の未熟な自分を捨て、生まれ変わるという「死と再生の儀式」である。言うまでもなく、狭くて真っ暗な通路は「胎内」に見立てられている。真夏の図書館での体験が、自分にとっての「胎内めぐり」であったと気づいたのは、それから後のこととなるが、私にとっては今も図書館は「胎内めぐり」で、自己の「再生」の場となっている。

Café KONOHON この本カフェ

豊島区は、日本有数のアジア文化交流地域。街では中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、ベトナムなど各国の食べものを手軽に楽しめる。表現芸術や文学など広い分野でも異文化理解の輪を広げる拠点として、これからが楽しみだ。

今回のテーマ

16杯目　多文化と出会う本

書名『時が滲（にじ）む朝』

楊逸／著　文藝春秋(文春文庫)　2011年

梁浩遠と謝志強は、苦労して大学に進学し、我愛中国を歌い上げ、寮生活が始まる。しかし1989年、天安門事件で警察沙汰を起こし、二人は大学を去り、それぞれの道を進む。浩遠は日本人と結婚し日本へ。志強は中国で働く。ここ中国でも、苦悩と挫折を繰り返しながら、若者は小市民の生活に帰っていく。国の体制は異なるが、常に若者は夢とロマンを追いかけるもの。漢詩と日本語の融和もあり、知的な刺激の多い小説である。楊逸は、日本語を母国にしない作家として、初めて芥川賞を受賞。

【石関 慎一（いしぜき しんいち）】

書名『ずっと―ねがいはひとつだけ―』

ケイト・クライス／文　M・サラ・クライス／絵　なかがわちひろ／訳
WAVE出版　2018年

愛犬バロンと初めて会ったのは、エリが生まれたばかりの時。だから、エリにとって彼は家族だ。とある日、エリは気づく、彼の老いに。ドキン。何をしてあげたら喜んでもらえるのか、エリはバロンのために一生懸命試みる。

バロンの心のつぶやきに胸を打たれ、切ない想いに涙が止まらない。彼のたったひとつの望み、願いは何でしょうか。お互いを想い合うことの大切さを私達に気づかせてくれるこの作品。是非手に取ってみてください。

【清水 悦子（しみず えつこ）】

書名『「韓流」と「日流」文化から読み解く日韓新時代』

クォン・ヨンソク／著　NHK出版　2010年

韓国には「反日感情」があり、日本大衆文化が「倭色文化」として規制されてきた歴史的な壁がある。しかしそれに風穴をあけたのは、日本の映画やドラマ、J-POPであり、村上春樹の作品をはじめとする日本小説ブーム。日本国内でも、韓国料理や儒教倫理色の強い韓流ドラマ・映画など、韓国文化の流行が一大潮流に。

日韓の一般市民つまり消費者が主体的に選び取ったこの異文化理解と交流スタイルには、持続性と拡張性があるという。今後これに中国も加わり「東アジア流」がブームとなれば、このエリアでの文学や映画賞の創設ほか文化・社会面での展開が期待できよう。

【中谷 範行（なかや のりゆき）】

寄稿者はとしまコミュニティ大学の学習者の内、登録して学んでいる「マナビト生」です。マナビトゼミ担当の人類学者佐藤壮広氏の指導のもと、毎回テーマに合わせて文学、児童書、評論や科学などの分野からお薦め本を1冊紹介しています。

豊島区とマンガ（全四回）

最終回

トキワ荘前夜～戦後・豊島区ゆかりの漫画家たち

としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会　小出　幹雄

「漫画集団」と池袋「人世坐」

前回は、昭和初期に豊島区千早に住んだ漫画原作者・小熊秀雄やプロレタリア漫画家たちの功績などについてご紹介しました。現南長崎2丁目にあったプロレタリア美術研究所の受講生でその事務員も兼ねていた小野沢亘（わたる）らと「カリカレ」という漫画雑誌を創った松下井知夫は「漫画昭和史－漫画集団の50年」（河出書房新社）のなかで、当局の捜査からの逃げ道として、当時流行していたエログロナンセンスを風刺漫画を描く上のオブラートとして使っていたと言っています。その後、松下は子供向け長編物語漫画も手掛け、戦後は少女向けストーリー漫画を手塚治虫の「リボンの騎士」に先立ち「少女クラブ」などに描いていました。松下は、手塚の結婚式の媒酌人も務めています。

「漫画集団」とは、明治大正時代からの先輩漫画家に対抗して若手たちが集まり、事務所とマネージャーを置きプロダクションとして結成した「新漫画派集団」が戦後まもなく新発足したものでした。その臨時事務所が終戦の年の暮れに置かれたのは高台にあり焼け残った豊島区高田本町の永井保（たもつ）の家でした。永井は、「広報としま」の「わたしの豊島紀行」というコーナーで「集団には戦前から親しくしていた先輩友人が多かった。その人たちが友団を結成してくれることになり、作家で人世坐の社長でもあった三角寛の肝いりで発会式を兼ねた『漫画集団・喜のカーニバル』を人世坐に於て催すことができた」と書いています。人世坐とは、後にトキワ荘の漫画家たちもよく通った池袋東口にあった映画館。「文士経営」と称し、同志会員には、久米正雄、永井龍男、井伏鱒二、江戸川乱歩らと並んで漫画集団でリーダー格の横山隆一も名を連ねていました。そういえば、小林秀雄が戦後すぐに龍男を誘って創刊に携わった新聞「新夕刊」の予告号には横山、清水崑らの漫画が掲載されており、文士と漫画家の交友の深さが分かります。池袋近住の漫画集団仲間では、千早町の南義郎、雑司ヶ谷に加藤芳郎もいました。

「人世」第31号
昭和26年12月28日発行
発行兼編集者：三角寛
発行所は豊島区雑司ヶ谷の
「文芸同志会編集部」とある

「六日会」と「児漫長屋」

漫画集団には、松下や「フクちゃん」の横山のように子供向け漫画を描くものも多くいましたが、基本的に大人漫画のグループでした。豊島区要町に住み、やはり空襲による類焼から免れた帷子（かたびら）すすむは、戦後最初に「少年倶楽部」に2ページ漫画「日出ちゃん」を連載しました。千早町の南も漫画社から「頑張り父娘」をなんと昭和20年11月15日に発行しています。

帷子は、第2回でご紹介した大正時代に子供漫画の先駆作品を描いた山田みのるの弟子で、山田を慕ってすぐ近隣に居を構えたそうです。昭和25年に、帷子と芳谷まさるの提案で両者の弟子である太田じろうが連絡係となり、児童漫画家たちが帷子宅に集まることになり、「六日会」が始まります。その会員には他に、花野原芳明、根岸こみち、古沢日出夫、木村一郎、入江しげる、笹山茂、宮坂榮一そして帷子の近所に住んでいた福井英一と木下としお がいました。

同年暮れ頃、出版美術家連盟のパーティーが上野で開かれ、その会に出席していた「冒険ダン吉」の島田啓三を中心に池袋で児童漫画家10数人の二次会があり、児童漫画家も会を作ろうという提案がされました。明けて昭和26年1月に会が発足、島田は「会長の自分が大家でみんなが店子という関係でやりましょう」と「児漫長屋」と命名、後に対外的には「東京児童漫画会」と名乗りました。控え目な帷子は参加せず、六日会は数回だけで自然になくなりました。

児漫長屋の会員たちは、トキワ荘の漫画家たちを結び付けた「漫画少年」誌でも活躍しましたが、同誌が廃刊になる昭和30年頃には「悪書追放運動」も始まり、漫画は悪書のレッテルを貼られてしまいます。良質な漫画を描いていた彼らにとっては寝耳に水だったことでしょう。また、昭和34年にはテレビの普及や少年漫画誌の週刊化など決定的変化が起こり、児漫長屋メンバーの多くはアニメの世界などに活躍の場を移していきます。アシスタント制を採用するなど時代の変化に対応していったのがトキワ荘の漫画家たちでしたが、児童漫画を急発展させた児漫長屋の存在がなければ、トキワ荘のマンガ文化も生まれなかったのは間違いないのです。

「頑張り父娘」南義郎作　昭和20年
終戦からわずか2週間後に漫画社は
雑誌「漫画」を復刊、そこに連載され
た「頑張り父娘」の単刊で早くも
戦後の世相をコミカルに扱っている

〈著者プロフィール〉
1958年、旧椎名町生まれ、トキワ荘記念碑設置実行委員会、トキワ荘通り協働プロジェクト協議会の事務局長歴任後、現在、としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会広報担当。NPO法人日本マンガ・アニメトキワ荘フォーラム理事

読んで観る！ 映像・舞台原作の世界（全4回）

◇最終回◇

資料から昔の舞台を復元する

立教大学兼任講師　後藤　隆基

昔の文献や資料を読むことは、私にとって生活の一部になっています。なんとも地味な日々……と我ながら思いますが、明治・大正時代の日本の演劇について研究している身としては、当時の新聞や雑誌記事などは情報の宝庫なのです。

かつて新聞には必ず芸能欄が設けられており、その横には大抵花柳界の動向を伝えるコーナーがありました。芸能界や花柳界をめぐる毎日の些細な出来事が載り、一種のゴシップ記事のような性格もあったわけです。新聞だけではありません。以前はたくさんの演劇雑誌が発行され、文芸誌や総合誌の類にも演劇の話題が豊富に載っていました。そうした小さな記事の数々は逝きし世の記憶の欠片であり、それらをひとつひとつ集め、パズルのように組み合わせることで、もう観ることのできない舞台やその制作プロセスを復元していく作業は、なかなか楽しいものです。

先日、豊島区立中央図書館が日本芸能実演家団体協議会（芸団協）から膨大な演劇資料の寄贈を受けた、という話を聞きました。中には非常に保存状態のいい演劇雑誌や、作家や役者の署名本なども多数あり、久松保夫氏の木偶坊（でくのぼう）文庫、六世中村歌右衛門丈の中村文庫といった旧蔵書も含め、きわめて貴重な資料群です。中央図書館の特集展示（一月二十四日まで）ではこれらの資料の一部が公開されていますが、「あうるすぽっと」という劇場と同じ建物にある図書館で、こうした演劇資料のアーカイブが整理されることは、豊島区の劇場文化のためにも大切な取り組みであり、心から応援したいと思います。

さて、昨年四月から、全八回にわたって担当させていただいた文学講座「読んで観る！　映像・舞台原作の世界」は一月でおしまいです。映像や舞台の原作となる物語を読むというコンセプトで行ってきた講座ですが、文学作品だけではなく、関連する文献や資料を読むことも「読書」の幅をひろげてくれるのではないでしょうか。

芸団協から寄贈された
「演芸画報」大正10年２月号
演芸倶楽部発行

〈著者プロフィール〉
立教大学兼任講師、日本女子大学・川村学園女子大学非常勤講師。専門は近現代日本演劇・文学・文化。著書に『高安月郊研究――明治期京阪演劇の革新者』（晃洋書房、2018）ほか。

図書館イベント情報

★…児童・あかちゃん向け　●…一般向け

毎週、本の読み聞かせなどのイベントを行っています。遊びに来てくださいね。

各図書館の連絡先
- □中央図書館　3983-7861
- □駒込図書館　3940-5751
- □巣鴨図書館　3910-3608
- □上池袋図書館　3940-1779
- □池袋図書館　3985-7981
- □目白図書館　3950-7121
- □千早図書館　3955-8361
- □雑司が谷図書貸出コーナー　3590-1335

主催／会場	おはなし会開催日		スペシャルイベント		
	幼児・小学生	あかちゃん	1月	2月	3月
中央図書館 児童コーナー （※印は会議室）	日曜日 14:00	最終日曜日 10:30 11:30	★6日・かるた大会※　14:00～15:00 ★13日・新年おやこ映画会※　14:00～14:30 ★19日・豊島岡女子学園おはなし会 14:00～14:30 ★27日・としまｊみち草の会おはなし会 14:00～14:30	★3日・おはなしこうさく会　14:00～14:30	★3日・おはなしこうさく会　14:00～14:30
駒込図書館 こまちゃんのへや （※印は 地域文化創造館）	土曜日 14:30	第1水曜日 11:00※	★12日・かるた大会※　14:30～16:00	●10日・百人一首大会※　14:00～16:00	●21日・名所ツアー　14:00～16:00
巣鴨図書館 地下会議室	水曜日 15:30	第3火曜日 11:00	★9日・カルタ大会　15:30～16:00	★20日・ほんのじかん こうさく会　15:30～16:00	★20日・ほんのじかん 紙芝居　15:30～16:00 ★27日・ほんのじかん 映画会　15:30～16:00
上池袋図書館 おはなしの部屋 （※印は地下ホール）	水曜日 15:00	最終水曜日 11:00※	★5日・親子で楽しむ映画会※　14:00～14:30 ★12日・かるた大会※　13:30～14:30 ★26日・親子で楽しむ映画会※　14:00～14:30	★23日・親子で楽しむ映画会※　14:00～14:30	★23日・親子で楽しむ映画会※　14:00～14:30
池袋図書館 ワークルーム （※印は区民集会室）	土曜日 14:30	第1水曜日 11:00	★12日・カルタ大会　14:30～15:30 ●16日・読み聞かせ講座※　10:30～12:00 ●20日・バリアフリー映画会※　13:30～15:30 ●21日・ふくろう俳句会※　10:00～12:00	●10日・イクメン読み聞かせ講座※ 14:00～15:00 ★23日・おはなしたんぽぽスペシャル 14:30～15:30	●13日・読み聞かせ講座※　10:30～12:00 ●18日・ふくろう俳句会※　10:00～12:00 ●21日・終活講座「想い出サロン」※ 14:00～16:00 ★30日・よんでみよう！やってみよう！かがくの本！※ 14:30～15:30
目白図書館 地下区民集会室	水曜日 15:00	第1水曜日 14:00	★12日・かるた大会　15:00～16:00 ●27日・バリアフリー映画会　14:00～16:00	●14・21・28日・俳句入門講座（3回連続） 10:00～12:00	★27日・外国語おはなし会　14:00～15:00
千早図書館 視聴覚室	第3水曜日除く 15:30	水曜日 10:30	★20日・かるた大会　15:30～16:00	★17日・工作会「ポップアップカードでひなまつり」 15:30～16:00	★17日・スペシャルおはなし会 「文字のないおはなし会」　15:30～16:00

日程・会場等が変更になることがあります。事前にお問合せください。

平成最後の書評講座（全3回）

平成の30年間を本で振り返り、語り合いましょう！また、図書館司書が選んだ「平成のベスト本100冊」の中から本を1冊選び、書評とポップを作成・展示します。

講師　佐藤壮広氏
（書評家、立教・大正大学非常勤講師）
日時　1月14日（月・祝）、20日(日)、27日(日)
午後1時～3時
※1回目（平成について語り合う）のみの参加も可。
場所　中央図書館
定員　なし（申込受付中）
申込　中央図書館企画調整グループ
電話 3983-7861　FAX 3983-9904
メール A0027900@city.toshima.lg.jp

＜平成30年を本で振り返る特集展示＞

平成のベスト本利用者投票…1月5日(土)～24日(木)
書評・ポップ展示期間…2月23日(土)～3月21日(木)

開催中！

東アジア文化都市・日本の伝統芸能

～公益社団法人日本芸能実演家団体協議会寄贈本展示～

重要無形文化財狂言保持者・人間国宝で、豊島区名誉区民でもある野村萬氏が会長を務める「公益社団法人日本芸能実演家団体協議会」から寄贈を受けた貴重資料の特別展示。

期間　11月24日(土)～1月24日(木)
場所　中央図書館5階特別展示コーナー

絵本作家　かさいまりさん トークショー

日時　2月3日(日)　午後2時～3時30分
場所　駒込地域文化創造館　第2会議室
定員　25名　（1月12日より申込受付）
申込　駒込図書館　電話 3940-5751

大人向け中央図書館ナイトガイドツアー

日時　1月26日(土)　午後6時15分～7時30分
場所　中央図書館
内容　普段入ることのできない閉架書庫内の見学など
定員　15名　（1月20日申込締切後抽選）
申込　1月11日（金）から1月20日（日）まで、中央図書館へ電話または来館にて　電話 3983-7861

大人の職場体験

日時　2月17日(日)　午前10時～12時、午後2時～4時
場所　巣鴨図書館 地下会議室
定員　各3名　（2月1日より申込受付）
申込　巣鴨図書館　電話 3910-3608

ふくろうハンドメイド倶楽部

日時　2月18日(月)　午前10時～正午
場所　池袋第三区民集会室
内容　フェルトで作る、春のつるし飾り
（材料費100円）
定員　15名　（2月1日より申込受付）
申込　池袋図書館　電話 3985-7981

目白アート散歩

日時　2月27日(水)　午前10時～正午
場所　徳川黎明会本部～目白庭園～上り屋敷公園～自由学園明日館～郷土資料館
定員　15名　（1月21日より申込受付）
申込　目白図書館　電話 3950-7121

ビブリオバトル

日時　3月24日(日)　午後2時～3時30分
場所　池袋第三区民集会室
内容　テーマ「窓をあけて」
定員　バトラー8名（2月11日より申込受付）
観覧者40名（当日直接会場へ）
申込　池袋図書館　電話 3985-7981

千早進歩自由夢（ちはやしんぽじゆうむ）

日時　2月16日(土) 午前10時～正午
講演　三遊亭 窓輝（さんゆうてい そうき）
内容　古典落語2題、落語に関する四方山話
定員　各部50名当日先着順

会場　千早図書館　視聴覚室
問合せ　千早図書館　☎3955-8361

図書館カレンダー

開館時間

	中央図書館	駒込・上池袋・千早図書館	巣鴨・池袋・目白図書館	雑司が谷図書貸出コーナー
	平日　午前10時～午後10時 土日祝　午前10時～午後6時	●駒込・上池袋● 平日　午前9時～午後8時 土日祝　午前9時～午後6時 ●千早● 平日　午前9時～午後7時 土日祝　午前9時～午後6時	●巣鴨● 平日　午前9時～午後7時 土日祝　午前9時～午後6時 ●池袋・目白● 平日　午前9時～午後8時 土日祝　午前9時～午後6時	平日　午前10時～午後7時 土日祝　午前10時～午後5時

○は土日祝の開館時間
■は休館日

※駒込図書館は、平日は、午前8時から資料の返却と、予約資料の受取りができます。

1月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

3月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

編集後記

- ●平成最後の年、本で平成を語りましょう！「平成最後の書評講座」でお待ちしています。（狩）
- ●はやいものでもう2019年。今年は個人的には結婚20年の記念すべき年。皆様にとって素晴らしい年になりますように。（こりす）
- ●今年は豊島区で「赤い電気バス」の運行がはじまります！バスに乗って「そうだ、図書館へいこう」という方が増えてくれると嬉しいです。（高）